

# 鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ ⑱

## 慶州博物館からも 「鬼」が消える！

—「鬼面瓦」から「龍面瓦」に—

2011年10月、鬼瓦の所蔵数が抜群の韓国国立慶州博物館を再訪しました。

前年訪問した国立中央博物館（ソウル）で、それまでの「鬼面文鬼瓦」「鬼面瓦」の表記を「龍面瓦」「怪獣面瓦」に変えて、「鬼」の文字がなくなってしまったこと（拙文⑮参照）をうけて、鬼瓦の本家ではどうかを確かめたかったのです。

## 誰でも無料の慶州博物館

「無料です。どうぞ」といわれて、気分良く入場しました。日本には、外国人でも誰でも無料の博物館があるでしょうか。

慶州博物館の中の雁鴨池（アナプチ）館、考古館、美術館の3か所に鬼瓦が展示されています。7年前の見学時と比べて、鬼瓦の展示数はかなり減っていましたが、見覚えのある貴重な宝物が並んでいました。

最初に入った雁鴨池館では、全てが以前の「鬼面鬼瓦」から「獣面瓦（スミョンワ）」に変わっていました。「鬼」という文字がどこにも見当たりません。「獣面」という表現は、中央博物館でも見なかったものです。



獣面瓦  
慶州博物館 雁鴨池館  
（以前は鬼面文鬼瓦）

前橋市 富山 弘毅

ところが、考古館では「鬼面瓦」のままでした。そして美術館では「龍面瓦」。

なんと、3館3様で異なる表記なのです。同じ慶州博物館の中での不統一です。

「鬼」が消されかかって、でもまだ消えきれないでいる感じなのです。

私は3館のそれぞれで質問しました。日本語が通じる職員を探し出すのにかなり時間がかかりました。

## 雁鴨池館では「獣面瓦」



獣面瓦 緑釉  
慶州博物館 雁鴨池館  
（以前は鬼面文鬼瓦）

まず雁鴨池館で展示を一巡して「獣面」に変わったことを確認した私は、入口にいた若い男性職員に「日本語がわかる職員はいらっしゃいませんか」と尋ねました。

首を横に振るばかりの彼に、「I have many questions.」とくりかえすと、彼は「ちょっとお待ち下さい」と、私の希望をつないでくれて、人探しに行きました。15分以上待たたでしょうか、呼ばれていくと、館内用電話を持って「電話で話せ」と手まねで言います。受話器の向こうに、日本語を話せる女性がいました。

しかし、「鬼面文鬼瓦が獣面瓦に変わったのはなぜですか」という私の質問に答えられず、何回かのやり取りのあと「お待ち下さい」。そして「調べてから、お返事します」。結局「わかりません」。

私は、隣の考古館には話せる人がいるか

もしれない」と思い、移動しました。

## 考古館では「鬼面瓦」

考古館に入り、鬼瓦の展示場所を探して歩いているとき、日本人に日本語で説明している女性職員を見かけました。おお、ここには日本語の出来る職員がいる！ しめた！

展示説明が「鬼面瓦」のままであることを確かめて、サービスコーナーに行き、「日本語の出来る方は？」ときくと、「いません」。「さっき、あの辺にいましたよ」「いいえ、いません」「でも……」。

食い下がって、やっと見つけることが出来ました。女性学芸員キムソイェンさんから、日本語で聞き出せたのです。

○説明プレートは 3~5 年ごとにリフレッシュする。雁鴨池館は昨年（2010 年）書き換えた。考古館での書き換えは、まだ先だ。

○プレートの表記は館長の意見で決まる。

○学者の中に鬼面派、龍面派、獣面派がいる。それらの代表的な学者の名は…。

○「鬼」というと、怖いし、気味が悪い感じがする、など。

しかし、館内不統一のわけは「わかりません」。

## 美術館では「龍面瓦」



Roof Tile with Dragon Design

龍面瓦 慶州靈妙寺址出土 統一新羅 8~9 世紀 国立慶州博物館 美術館（以前は鬼面瓦）

美術館で 1 個だけ展示されていた鬼瓦

は「龍面瓦」に変わって、英文説明ではドラゴン Dragon になっていました。

3 館がバラバラなのです。

これでは、わからないまま引き上げるわけには行きません。私は粘りに粘りました。

とうとう美術館のフロントに日本語を話せる男性研究者が来てくれました。ソウルの中央博物館から 2011 年春、転勤してきたというペヨンイル先生でした。

## 「慶州では龍面瓦に統一する」

彼は「私は瓦が専門ではない」とことわりながらも、12 月に更新する新カタログを準備中であること、慶州博物館は全館で、来年（2012 年）には「龍面瓦」に統一すると述べました。そして、私の質問に答えて、次のような話もしてくれました。

○韓国ではこれまで日本の呼びかたを採用して「鬼瓦」と表現してきたが、「龍」だという見解が強くなり、見直す機運が高まっている。

○慶州博物館の書き換えは独自の判断で、全国で統一するというものではない。

○鬼瓦の学会とか全国的な研究会があるわけではない。

○日本は鬼瓦を考古学で対象にするが、韓国では美術の分野で扱っている。しかし研究者が少ないので会議で決めるといっても大変である、など。

韓国の文化・学問が大きな変化、発展の最中にあることを実感し、納得しました。

そんな話を聞いた私は、釜山の仙岩寺大雄殿では龍頭瓦、鬼瓦（鬼板）、鬼の絵と縦に並んでいるが、この鬼瓦の顔は「鬼ではなく、龍かもしれないな」と思い始めたのです。（拙文⑩参照）

## 鬼か龍か？ 仙巖寺の墓碑

その翌々日、光州の仙岩寺（仙巖寺）に行きました。釜山のそれと同名の寺です。歴代の高僧の墓地があり、石碑が並んでいます。その中に、私は「鬼」だと思いたい

が案内者のタクシー運転手は「龍」だと断言する墓碑がありました。



光州 仙岩寺 高僧の墓碑 龍か鬼か

日本の鬼瓦は、もちろん独自に発展したのですが、おおもとのルーツは、韓国の龍なのではないでしょうか。

## 「龍」とは何か

今年は辰年、龍の年です。いったい「龍」とはなにものなのでしょう。

### 中国由来の龍

中国では青龍、麒麟(きりん)、鳳凰(ほうおう)、靈龜(れいき)を四大靈獸として神聖化します。南宋時代の羅願(1136~1184)編・著の博物誌『爾雅翼(じがよく)』では、龍は九つの動物の特徴を備え、角は鹿、頭はらくだ、目は鬼(幽霊)または兎、身体は蛇、腹は蛟(みずち=想像上の動物)、うろこは鯉、爪は鷹、掌は虎、そして耳は牛に似ているといひます。口ひげは長く、のど下には逆鱗があり、あご下に如意宝珠を持っています。

『史記』(紀元前1 C. 司馬遷編纂の歴史書)が、天子である皇帝は龍と交わって生まれた龍子で、優れた能力を授けられていると書きました。それ以降、王族や皇帝などは龍をシンボルとして建物の内外、旗幟(きし)、船、衣服などに龍の図柄を好んで使いました。中国の建築物に必ずと言

ってよいほど載っている鬼龍子(きりゅうし=中国の鬼瓦)には動物、鳳凰や英雄像などいろいろありますが、断然トップは龍です。龍は守護神でもあるのです。

大河の水を治めるものが国を治める皇帝だとされて、北京と瀋陽の故宮は龍だらけ。北京の故宮の九龍壁の中央の絵は正面から龍を描いたもので、その顔は日本の鬼瓦を連想させます。

### 韓国の龍

韓国の鬼瓦の圧倒的多数は龍面ですが、日本の龍とはまるで違うデザインです。

前号までにたくさん紹介しましたが、大型の鬼瓦はほとんど「龍面文鬼瓦」というより「龍頭瓦」と呼ぶべきものです。『爾雅翼』による龍の特徴を良く備えたものですが、韓国で独自に発達した型なのでしょう。中国や日本ではほとんど見られません。

中国でも韓国でも、戦闘の時には龍の旗幟を立てて進軍しました。そのデザインになったのが、韓国では、ちょっとマンガチックな龍の顔で、寺院の建物だけでなく、四天王や仁王の腹、太鼓の腹などにも極彩色で描かれています。



弾除け(盾内防牌) 龍 朝鮮時代  
韓国戦争記念館(ソウル)

また、寺院の門や建物の正面を飾る彫刻には、大きな龍があるのが普通です。女帝を象徴する不死鳥・鳳凰(ほうおう)は、聖天子の出現を待ってこの世に現われるとされますが、寺院建築の隅瓦や彫刻で龍とともに並んでいることもあります。

韓国では、小型の棟端瓦、隅瓦、軒先瓦、

軒丸瓦の圧倒的多数に、宝珠をくわえたり追いかけたりする 1 匹または 2 匹の龍が刻まれています。

## 西欧では悪魔・ドラゴン

龍には翼がありませんが空を自由に飛べるようです。

世界最古の龍は、ユーフラテス川のほとりの古代都市バビロンのイシュタル門(紀元前 600 年代。ベルリン・ペルガモン博物館所蔵)のレンガに描かれた絵だといえます。頭は蛇、鋭い爪の足は鷲、尾はさそり、洪水を引き起こすとされたようです。

それが西欧に伝わるとドラゴンになります。大きな翼を備え、凶暴な怪獣で、悪霊、悪魔と恐れられ、旧約聖書でも新約聖書でも「倒すべき敵」とされます。

しかし北欧では、バイキングの船首を飾る守護神です。またカンボジアのアンコールワットのナーガは水をあやつる神で龍の一種とされます。

## 日本の龍

日本では古くから民話・伝説に出てきます。古墳壁画などの四神の青龍のほか、「日本書紀」の八岐大蛇(やまたのおろち)、「古事記」は八咫遠呂智)も龍の一種とされます。水を司る神獣ですから、大雨、嵐は龍の仕業です。ひでりのときは龍神に雨乞いをし、航海の平穏を海の龍神に祈ったりします。

日本では寺社などに共存しているのだから、鬼と仲間なのではないかと思うのですが、鬼のイメージは「畏怖」で、恐ろしいもの。龍は「瑞祥」で、吉兆、ありがたい守護神。かなり異なります。

## 希少な日本の龍面文鬼瓦

日本では 鬼面文鬼瓦に混じって、まれに龍面文鬼瓦が見つかることがあります。寺院の塔、金堂、講堂などの辰(東南東)または辰巳(東南)の方位にあるのが、ほぼ法的です。

日本人のデザイン感覚は世界でも抜群

だと感嘆するのは私だけでしょうか。家紋や寺紋の鬼瓦デザインのすばらしさにはうっとりするほどですが、とくに龍の特徴を数十センチ四方に圧縮してすごい迫力でにらみを利かす龍面文鬼瓦のデザインには、本当に圧倒されます。これらが、日本の龍面文鬼瓦の典型です。



京都市  
清涼寺  
本堂  
東南



三重県  
亀山市  
善導寺  
本堂北西1鬼



京都市  
泉涌寺  
一層東南  
舍利殿



法蔵院 山門 大阪市天王寺区 (左) 龍 (大棟)、(右)子鬼を投げた鍾馗 (南隅瓦)、(右下) 投げられた子鬼 (北隅瓦)



日本の鬼瓦の龍は狭いところに押し込められたデザインですが、短いがまっすぐな2本の角が共通しています。

鬼師が精魂傾けて作り上げた芸術的な龍瓦。そのトップは、大阪の四天王寺近くにある法蔵院山門です。2匹の堂々たる龍が向かい合い、隅瓦は鍾馗（しょうき）と小鬼です。こんなみごとな作品が、なぜ文化財指定されないのでしょうか。

鍾馗は、主に中国の民間伝承に伝わる道教系の神。日本では、疱瘡除けや学業成就に効があるとされ、京町家など近畿～中部地方で屋根の軒先に鍾馗の小像を見かけることがあります。しかし、これほどダイナミックで物語性を持つ屋根は見たことがありません。拍手喝采です。

私が訪れた02年10月には山門を残すだけになっており、特別な保存の手を打つ

必要があるのではないかと案じています。

このように、龍の長い全身を表現した瓦は稀ですが、数例発見したうち、群馬県藤岡市一行寺の龍は、本堂正面をまっすぐに向いている形で異例です(拙稿⑥に掲載)。

鬼瓦の中に、いったいなぜ龍瓦が入りこむのか。いつごろからか。鬼と龍の関係は？ 格に差があるのか、等々について、研究し解明した学者がいるか、寡聞にして知りません。

私は日本では、龍面文鬼瓦を100例近くカメラに収めてきましたが、鬼面文鬼瓦の1000分の1以下ではないでしょうか。龍の字のつく寺名は多いのですが、龍面文鬼瓦があるとは限らないのです。(つづく)